

平 林 遺 跡

序 文

ゆとりと豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保護・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、その一方で道路建設や住宅造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模な整備などの各種事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきています。なかでも、土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には重要な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は主要地方道大衡落合線道路改良事業に先立つて実施した平林遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査により遺跡の性格を解明する上で貴重な成果が得られました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後に、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対して、厚く御礼申し上げる次第です。

平成20年3月

宮城県教育委員会

教育長 佐々木 義 昭

例　　言

1. 本書は宮城県仙台土本事務所との協議に基づき実施した、「主要地方道大衡落合線道路改良事業」に伴う「平林遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査に際しては、大衡村教育委員会からご協力を賜った。
4. 本書の第1図は、国土交通省国土地理院発行の「七ツ森」「吉岡」の縮尺1/25,000の地形図を複製して使用した。
5. 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
6. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。遺構番号は遺構の種別に関わらず、調査の際に付した番号を通し番号で用いている。

SI：竪穴住居跡 SA：柱穴列 SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SE：井戸跡 SK：土壙跡
7. 土色の記載にあたっては『新版 標準土色帖 1994年度版』(小山・竹原1994)を使用した。
8. 遺構の方向は「N-23°-W」と表記した場合、座標北に対し西へ23°偏していることを表す。
9. 遺構平面・断面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

調査区全体図：1/1000 遺構配置図：1/200・1/250
竪穴住居跡・溝跡断面・井戸跡・土壙跡：1/60 掘立柱建物跡：1/80
10. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として1/3で、土製品・鉄製品・一部の陶磁器のみ1/2である。
11. 遺物実測図では土師器の黒色処理部分はスクリーントーンによって表現した。
12. 遺構・遺物の整理は初鹿野博之が行った。
13. 本書の執筆・編集は、調査担当者の協議の後に初鹿野博之が行った。
14. 本遺跡の調査成果については、すでに文化財保護課ホームページなどでその内容の一部を公表しているが、本書と内容が異なる場合は、本書がこれに優先する。
15. 発掘調査の記録や出土品は宮城県教育委員会が保管している。
16. 陶磁器の産地や時期については、多賀城市埋蔵文化財センターの千葉孝弥氏にご教示いただいた。

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯.....	2
第Ⅱ章 遺跡の概要と歴史的環境.....	2
第Ⅲ章 発掘調査.....	4
1. 調査の方法と経過.....	4
2. 発見された遺構と遺物.....	4
A 古代	
B 中近世	
(1) 掘立柱建物跡・ピット群	
(2) 溝跡 (3) 井戸跡	
C その他の遺構・遺物	
第Ⅳ章 まとめ.....	22

参考文献

写真図版

調査要項

遺跡名：平林遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：No.26029 遺跡記号：RH）

所在地：宮城県黒川郡大衡村大衡字平林 地内

調査原因：主要地方道大衡落合線道路改良事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：確認調査 佐藤則之 須田良平

事前調査 菊地逸夫 佐藤貴志 志間貞治 尾形祐之 初鹿野博之

調査期間：確認調査 平成18年5月9日

事前調査 平成19年5月7日～6月18日

調査面積：確認調査 約223m²

事前調査 約2000m²

調査協力：大衡村教育委員会

第Ⅰ章 調査に至る経緯

本書は「主要地方道大衡落合線道路改良事業」に伴って、平成19年度に実施した大衡村平林遺跡の発掘調査報告書である。この工事は、黒川郡大衡村大衡地内の国道4号線と仙台北部中核工業団地を結ぶ道路建設工事で、ルート上に周知の遺跡である平林遺跡がかかることから、平成17年度に宮城県教育委員会と宮城県仙台土木事務所が協議を行った。それにより、工事が遺跡に与える影響が大きいと判断したため、平成18年5月9日に遺跡範囲や性格を把握するための確認調査を実施した。約2500m²を調査対象として、7本のトレンチ（合計約223m²）による確認調査を行った結果、堅穴住居跡・溝跡・井戸跡・ピット等が発見された。そのため、再び宮城県仙台土木事務所と協議して事前調査の実施を決定し、平成19年5月7日から調査を開始した。

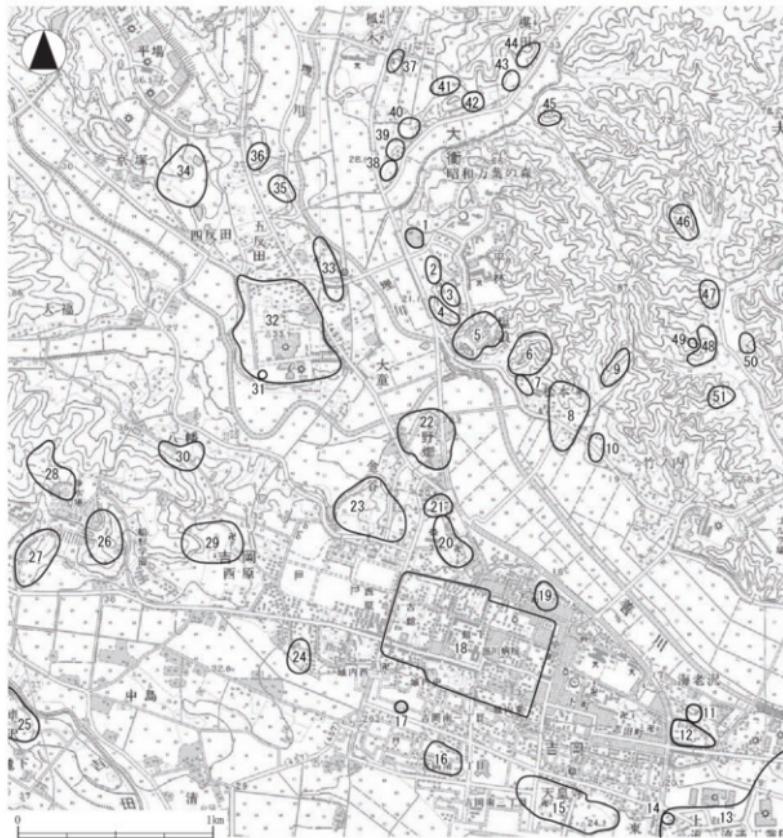
第Ⅱ章 遺跡の概要と歴史的環境

平林遺跡は宮城県黒川郡大衡村大衡字平林にある。村役場の西方約300m、国道4号線の東側に位置し、かねてから縄文時代と古代の複合遺跡として知られていた。大衡村の大部分は大松沢丘陵と呼ばれる丘陵部にあたり、村の南側と国道4号線沿いには、吉田川とその支流の善川や埋川によって沖積地が形成され、河岸段丘が発達している。平林遺跡は埋川の東岸、南西に延びる丘陵の端部に位置し、標高は24~29mである。周辺の段丘上や丘陵麓・斜面には、縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が分布する。ここでは、今回の調査と関連する古代・中近世の歴史的環境について概観しておく。

古代では官衙・集落跡などの遺跡の調査が行われている。一里塚遺跡（大和町）では8世紀後半から9世紀初頭頃の官衙施設と考えられる倉庫跡などが検出され、黒川郡衙の可能性が指摘されている。また、その南には外郭に区画施設を伴う集落の存在も判明している（宮教委1999ほか）。中峯A遺跡・中峯C遺跡（大和町）からは堅穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出され、9世紀の集落遺跡とされている（宮教委1985）。亀岡遺跡（大衡村）からも9世紀初頭前後の堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土器焼成遺構などが検出されている（大教委1995ほか）。

鎌倉時代になると、大衡村域は北条得宗家の家臣であった渋谷氏・児玉氏の支配下に入り、以後その一族が領主となる（『大衡村誌』）。中世の遺跡の調査例は少ないが、同じ黒川郡の大和町・富谷町・大郷町も含めて、紀年銘のある石碑・経筒などが知られている。平林遺跡の西方約2kmにある大福寺跡には、嘉暦二年（1327年）銘のある板碑が存在する。また、南へ約5.7kmの富谷町ニノ間にある館山經塚からは、永和二年（1376年）の銘を持つ青銅製経筒が出土している（『富谷町誌』）。中世末期には、渋谷氏の大衡氏の居城とされる大衡城・古城館跡が平林遺跡の南に存在する。

江戸時代になると黒川郡は仙台藩領となる。元和二年（1616年）に伊達政宗の三男宗清が下草古城（大和町鶴巣下草）から吉岡城（大和町吉岡）に移転し、城下町が形成される。同じく下草から吉岡に移転したとされる天皇寺の周辺からは、17世紀初め～18世紀代の掘立柱建物跡・井戸跡などが検出されている（宮教委1990）。その他に、旧大衡役場前遺跡からは近世の区画溝・掘立柱建物跡などが検出されている（宮教委2007）。



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	平林遺跡	散布地	縄文・古代	18	吉岡城跡	散布地・城郭	縄文・近世	35	小舟御道跡	散布地	縄文晩
2	八幡神社北遺跡	散布地	縄文	19	安樂瓦窯跡	散布地	縄文・後	36	小舟御道跡	散布地	縄文中・後
3	八幡神社道路	散布地	縄文	20	中興寺遺跡	散布地	縄文・晚	37	大森中学校東遺跡	散布地	縄文
4	八幡神社南遺跡	散布地	縄文	21	石神沢遺跡	散布地	縄文・平安	38	孤木人遺跡	散布地	縄文
5	大曾根城跡	城郭	散布地	22	田大舟遺跡	集落	古代・近世	39	孤木B遺跡	散布地	古代
6	古城跡	城郭	中期	23	金谷遺跡	散布地	縄文中・晩	40	孤木C遺跡	散布地	縄文
7	松木川・C遺跡	散布地	古代	24	南金谷中遺跡	散布地	縄文	41	孤木D遺跡	散布地	縄文
8	松木遺跡	散布地	縄文・古代	25	序遺跡	散布地	縄文中	42	長角八遺跡	散布地	古代
9	今只遺跡	散布地	古代	26	中条八遺跡	集落	縄文・平安	43	長角B遺跡	散布地	縄文
10	要之遺跡	散布地	古代	27	中条日遺跡	集落	清文平・前・後世・古代	44	長角C遺跡	散布地	古代
11	海王川遺跡	散布地	縄文中	28	中条C遺跡	集落	平安	45	御洋遺跡	散布地	縄文
12	赤坂遺跡	散布地	縄文中・古代	29	一ノ坂遺跡	散布地	縄文中・古代	46	御田今戸遺跡	散布地・削削	縄文前・後・古代
13	平坂遺跡	散布地・官衙	平安・中世	30	中山遺跡	散布地	平安	47	御田B遺跡	散布地	縄文
14	平坂	里塙	近世	31	亀岡古墳	古墳		48	御浜八遺跡	散布地	縄文・古代
15	丸塚			32	龜岡古跡	散布地	縄文中・晚・古代	49	御浜B遺跡	古墳	
16	東新野野寺遺跡	散布地	縄文・古代	33	大堀遺跡	散布地	縄文	50	五丁沢遺跡	散布地	縄文・古氏
17	单差跡	散布地	古代	34	西反田遺跡	散布地	縄文早・前	51	高代田遺跡	散布地	縄文・古氏

第1図 平林遺跡と周辺の遺跡

第Ⅲ章 発掘調査

1. 調査の方法と経過

今回の調査区は南西に緩やかに下る傾斜地となっており、平成18年5月に実施した確認調査の結果をもとに、事前調査が必要とされた約2500m²を対象とした。

発掘調査は平成19年5月7日から開始した。調査区を遺跡の地形や道路などによる区画から、便宜的に1区から4区に分け（第2図）、この中で遺構が密に存在すると予想された1区から3区については全面調査を、4区についてはトレンチによる確認調査を行った。その結果、4区は大きく削平を受けており、一部に残る旧地形からも遺構が検出されず、しかも傾斜が急であることから確認調査のみに留めた。

1区～3区は重機による表土除去の後、遺構確認を行い、古代の堅穴住居跡、中近世の掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、ピット群などを検出した。これらの遺構の精査・実測を行い、6月18日ですべての作業を終了した。最終的な調査面積は約2000m²である。

調査区内のグリッドは、2点の工事用基準杭（第2図の基1と基2）を結ぶ線を基線とし、基1を原点とする3m方眼で設定した。基準杭の国家座標は次の通りである。

- ・基1：X = -170571.967 Y = 4117.362
- ・基2：X = -170524.968 Y = 4177.406

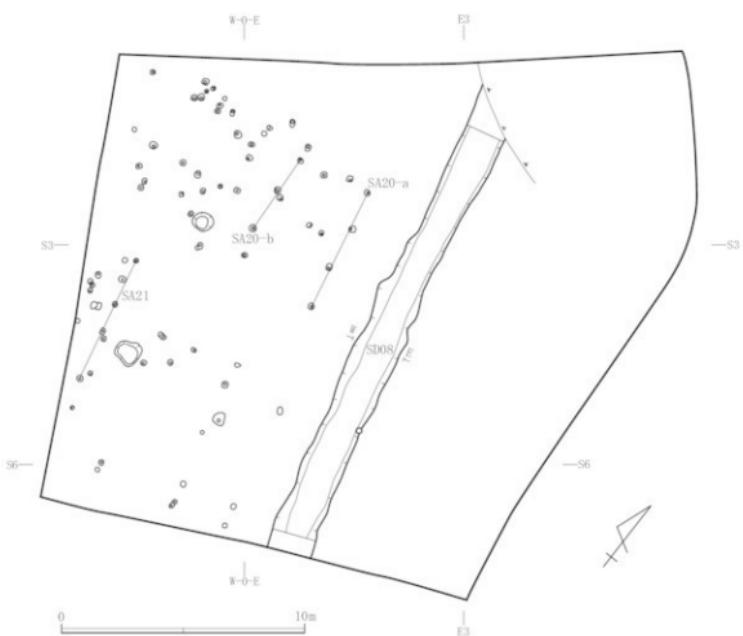
平面図中の地区割りでS18、E18などの表記は、基1から南に18m、東に18mに位置にあることを示している。なお、平面図のグリッド北は国家座標北に対し西へ38°03' 傾している。

遺構平面図・断面図は縮尺1/20で、調査区平面図は縮尺1/200で作成した。写真はデジタルカメラと35mmモノクロフィルムで各遺構を撮影し、一部の遺構と調査区全景は6×7モノクロフィルムでも撮影した。

2. 発見された遺構と遺物

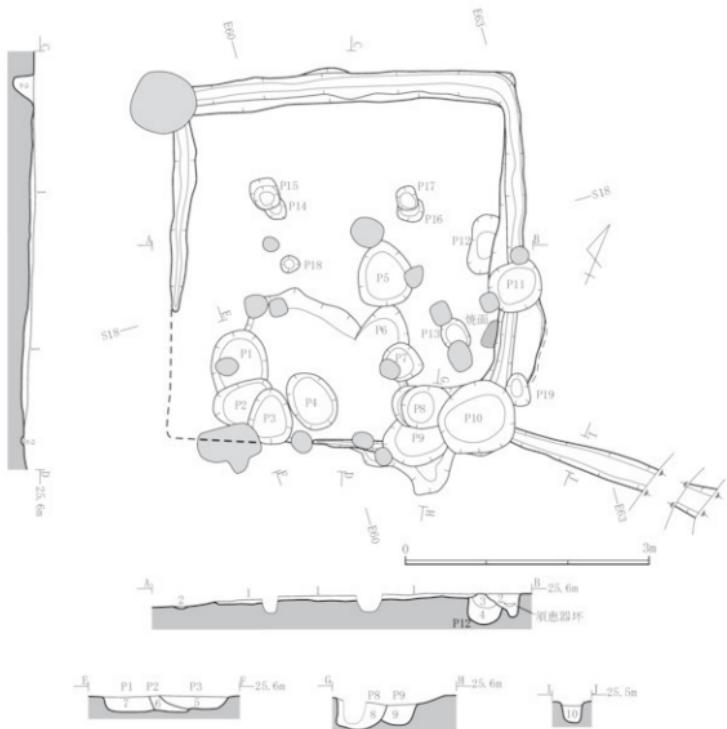
各調査区の検出遺構は第3図・第4図に示した通りである。1区は柱穴列3本、溝跡1条、ピット群が検出された。2区は開田の際に大きく削平されており、南側で少数のピットが検出されたのみであった。3区は、東側は削平を受けていたが、中央から西側にかけて遺構の分布が密に認められ、堅穴住居跡1軒、掘立柱建物跡7棟、溝跡2条、井戸跡3基、土壤1基、ピット群が検出された。遺物は土師器、須恵器、鉄製品、陶磁器、縄文土器、石器などが整理用コンテナで約4箱出土した。

これらの遺構・遺物の多くは古代と中近世に大きく分けられることから、ここでは各時代に分けて説明する。





第4図 2区・3区遺構配置図 (1/250)



参考		
1	土 色	上 性
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト 地山ブロック小・焼土粒をわずかに。炭化物を少量含む。しまり強。
2	黒褐色(10Y3/2-3/3)	シルト 焼土粒をわずかに含む。しまり弱。同溝堆積土。
3	褐色(10YR4/4)	シルト 炭化物・焼土ブロックを多量、地山ブロックを少量含む。しまり強。P12堆積土。
4	半褐色(10Y3/2-3/3)	シルト 烧土ブロック・焼土ブロックを多量、地山ブロックを多量含む。しまり強。P12堆積土。
5	褐色(10Y4/4)	シルト 烧土粒・炭化物を多量、地山ブロックを少量含む。P3堆積土。
6	黒褐色(10Y3/2-3/3)	シルト 烧土粒・炭化物を少量、地山ブロックを中量含む。P2堆積土。
7	黒褐色(10Y3/2-2/3)	シルト 地山ブロックを多量、焼土粒・炭化物をわずかに含む。P1堆積土。
8	黒褐色(10Y3/2-2/3)	シルト 烧土粒・炭化物・地山ブロックを少量含む。P5堆積土。
9	暗褐色(10Y3/3-3/3)	シルト 烧土ブロック・炭化物を非常に多く。地山ブロックを中量含む。P9堆積土。
10	黒褐色(10Y3/2-3/3)	シルト 烧土粒・炭化物・地山ブロックを少量含む。外底溝堆積土。底面付近に非常に薄くやや明るい層があり、調査用時の堆積と考えられる。

第5図 SI01堅穴住居跡 (1/60)

A 古代

【SI01堅穴住居跡】(第5図～第7図)

〔位置・重複〕 3区中央部南東寄りにあり、SB25掘立柱建物跡やピットと重複し、これらより古い。

〔規模・平面形〕 東西約4.3m、南北4.6mのほぼ正方形を呈する。削平を受けており、南西部は床面

付近が残るのみである。

〔方向〕 東壁でN-23°-Wである。

〔堆積土〕 1層認められ、暗褐色シルトで、残りの良い部分でも厚さ5~10cm程度である。自然堆積と考えられる。

〔床面〕 地山をそのまま床面にしたと考えられる。住居の南半部には多数の土壙が掘られ、床面が壊されている。

〔カマド〕 東辺やや南寄りに焼面が検出され、この付近にあったものと考えられる。

〔柱穴〕 位置的にP14~P17が主柱穴の可能性がある。長軸30~40cm、短軸25~35cmの不整な円形もしくは隅丸方形を呈し、深さは床面から20~40cmで、堆積土はいずれも炭化物を多く含む黒褐色シルトである。柱痕跡は認められなかった。P14とP16、P15とP17が対になっており、住居の建て替えが行われたと考えられる。南側で対応するピットは検出されなかった。

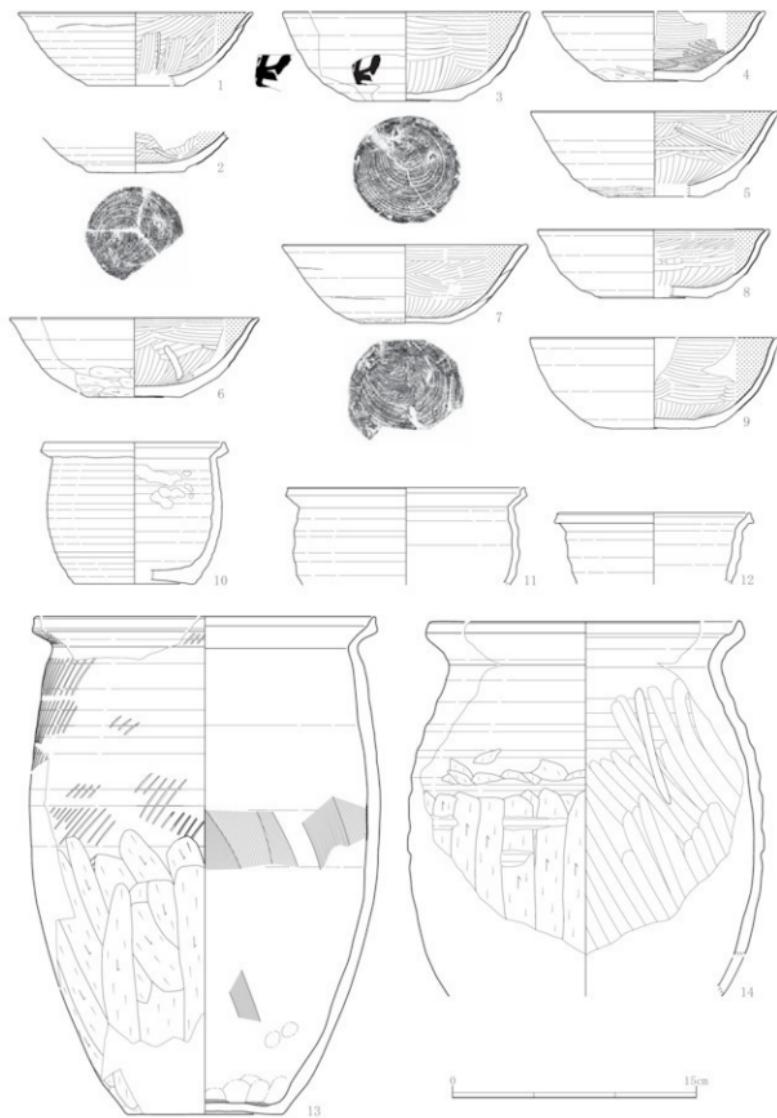
〔周溝〕 断面はU字形で、壁は住居外側では直に立ち上がり、内側では緩やかである。最も深いのは外延溝につながる東辺南寄りで床面から約25cmあり、南西部は削平により失われている。周溝の堆積土はしまりのない土で、壁材の痕は認められず、抜き取りの可能性がある。また、外延溝と連絡することから、排水用の暗渠としても機能していた可能性がある。なお、周溝南東部分からは遺物が大量に出土している。

〔外延溝〕 断面はU字形を呈し、深さは住居の床面から約30cmで、先端に向かってわずかに傾斜している。調査区際で擾乱によって壊されており、残存部分の長さは約250cmである。

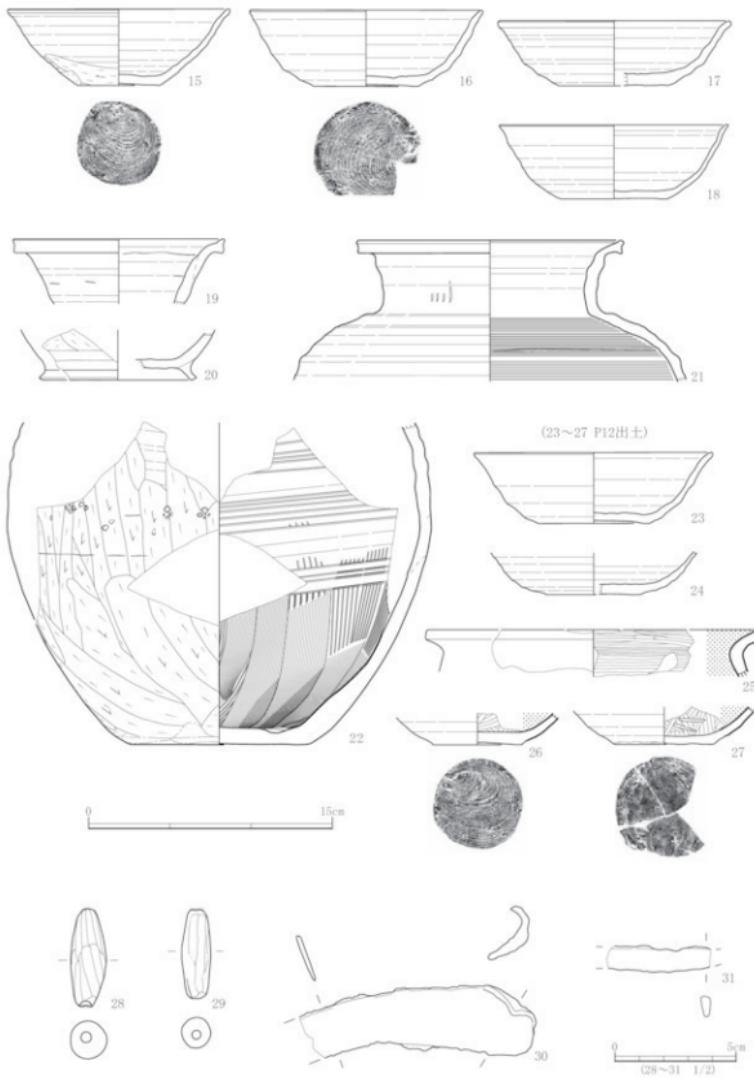
〔その他の遺構〕 床面を検出した段階で、住居南側を中心に多数の土壙が確認された。P1~P11の堆積土は、住居や周溝の堆積土と同様にしまりがない。また、これらの土壙出土遺物には、他の土壙や住居・周溝の堆積土などから出土した遺物と接合関係が認められる。特に、P10からは遺物が多く出土し、カマドの構築材と考えられる被然した礫や、スサ入りの焼土なども含まれている。よって、これらの土壙は住居廃絶時、あるいは廃絶後間もない段階に掘られたものと考えられる。一方、まったく異なる特徴を示すのがP12で、周溝に切られ、堆積土が非常に固くしまっていることから、古い段階に掘られたものと考えられる。

No.	大きさ(cm)	平面形	断面形	深度	堆積土の特徴	遺物接合関係	新旧関係
P1	76~×67	楕円形	楕状	27	地山ブロック多い	P10, 1層	
P2	76~×50~	楕円形	楕状	28		P3, 1層	P1~P2~P3
P3	78~×34	楕円形	楕状	24	地土粒・炭化物多い	P2, 1層	
P4	75~×54	楕円形	楕状	25			
P5	80~×64	楕円形	楕状	8		P10	
P6	64~×60~	楕円形	楕状	13			
P7	50~×48	円形	楕状	21			
P8	58~×51	楕円形	U字状	43		P10, 外延溝, 床, 1層	
P9	74~×60~	楕円形	U字状	37	地土粒・炭化物非常に多い	周溝	P9~P8
P10	93~×86	円形	U字状	38	遺物多い、破土・焼けた礫（カマドの構築材？）を含む	P1, P3, P8, 周溝, 外延溝, 床, 1層	
P11	64~×64	円形	U字状	26			
P12	73~×42~	楕円形	U字状	32	固くしまる、地土ブロック・炭化物・地山ブロック多い	周溝	P12~周溝

表1 SI01内 土壙一覧表



第6図 SI01竪穴住居跡出土遺物①



第7図 SI01竪穴住居跡出土遺物②

No.	遺物	部位	法量cm			特	性	残存
			口径	底径	高さ			
1	土師器 壺	周溝	14.4	6.0	4.5	外：ロクロナデ 内：ミガキ-黒色処理 底：回転糸切		1/3
2	土師器 壺	P2+P3+1脚	-	6.0	-	外：ロクロナデ 内：ミガキ-黒色処理 底：回転糸切	破片	
3	土師器 壺	P8	15.0	6.5	5.5	外：ロクロナデ、墨書き〔市〕内：ミガキ-黒色処理 底：回転糸切		3/4
4	土師器 壺	P8	13.7	6.0	4.3	外：ロクロナデ 内：ミガキ-黒色処理 底：回転糸切-体下手持ちヘラケズリ		1/3
5	土師器 壺	P8+床面	15.2	6.0	5.3	外：ロクロナデ 内：ミガキ-黒色処理 底：回転糸切り-底周縁-体下手持ちヘラケズリ		1/4
6	土師器 壺	P9	15.4	5.8	4.9	外：ロクロナデ 内：ミガキ-黒色処理 底：回転糸切-体下手持ちヘラケズリ		1/3
7	土師器 壺	P10	15.1	5.5	4.9	外：ロクロナデ 内：ミガキ-黒色処理 底：回転糸切-体下手持ちヘラケズリ		3/4
8	土師器 壺	P10	14.2	7.0	4.2	外：ロクロナデ 内：ミガキ-黒色処理 底：回転糸切		1/3
9	土師器 壺	P10	15.2	7.6	5.6	外：ロクロナデ 内：ミガキ-黒色処理 底：回転糸切		1/2
10	土師器 小型壺	周溝	11.0	7.4	8.7	内外：ロクロナデ、内面火ハネ軋あり 底：回転糸切		3/4
11	土師器 小型壺	周溝	11.6	-	-	内外：ロクロナデ		1/6
12	土師器 小型壺	P10+床面	11.8	-	-	内外：ロクロナデ		1/6
13	土師器 壺	周溝	20.8	9.6	30.6	外：タタキ-ロクロナデ-体下ケズリ、内：ロクロナデ-ハケ目、オサエ		3/4
14	土師器 壺	周溝	18.8	-	-	外：ロクロナデ-体下ケズリ、内：ロクロナデ-ナメ		1/6
25	須恵器 壺	周溝	13.6	5.2	4.7	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り-体下手持ちヘラケズリ		2/3
26	須恵器 壺	外延溝+P8+P10	14.2	6.4	4.7	内外：ロクロナデ 底：回転糸切		1/3
27	須恵器 壺	P10	14.4	6.8	4.0	内外：ロクロナデ 底：回転糸切		1/6
28	須恵器 壺	P10	14.2	6.6	4.6	内外：ロクロナデ 底：回転糸切		1/6
29	須恵器 壺	周溝	13.0	-	-	内外：ロクロナデ	破片	
30	須恵器 壺	周溝	9.1	-	-	外：手持ちケズリ-付け高台 内：ロクロナデ	破片	
21	須恵器 壺	P9+周溝	16.2	-	-	外：通行たき-ロクロナデ 内：ロクロナデ(カキメ)		1/6
22	須恵器 壺	P10	11.4	-	-	外：タタキ-ロクロナデ-ケズリ 内：ハケ目ナメ-ロクロナデ(カキメ) 底：ナメ		1/6
23	須恵器 壺	P12	14.8	6.8	4.4	内外：ロクロナデ 底：回転糸切		1/2
24	須恵器 壺	P12	-	5.8	-	内外：ロクロナデ 底：回転糸切		1/4
25	土師器 跖	P12	20.4	-	-	外：ロクロナデ、擦耗調査 内：ミガキ-黒色処理	破片	
26	土師器 壺	P12	-	5.5	-	外：ロクロナデ 内：ミガキ-黒色処理 底：回転糸切	破片	
27	土師器 壺	1脚	-	6.4	-	外：ロクロナデ 内：ミガキ-黒色処理 底：回転糸切-一部分のミガキ	破片	
		長さ	幅	厚さ				
28	骨灰土跡	周溝	3.0	1.5	1.6	孔径4mm、直さ7mm、ナメ整形		完形
29	骨灰土跡	カラン	3.7	1.2	1.3	孔径3.5mm、直さ4g、ナメ整形、削耗調査		完形
30	鉄製品 罐	1脚	(8.7)	2.7	0.2	先端欠		2/3
31	鉄製品 刃子	1脚	(4.2)	1.0	0.4	基部・先端欠		1/3

表2 SI01出土遺物観察表

【遺物（第6～7図）】床面からは少數の破片が出土したのみで、大半の遺物は土壤、周溝から出土している。23～27はP12の出土遺物で、それ以外はその他の土壤、周溝、堆積土などからの出土である。

1～9は土師器の壺である。すべてロクロ調整で、口径15cm、底径6cm、器高5cm前後のものが主体である。底部の切り離しのわかるものはすべて回転糸切りで、体下部～底部周縁に手持ちヘラケズリを施すものが多く認められる（4～7）。内面のミガキは概して雑であり、部分的にロクロナデを残すものも見られる（3, 7, 8）。3は墨書き土器で、欠損しているため明確でないが、逆位に「市」と書かれている可能性がある。4はミガキの一部が条線のようになっている。9は底面全体に手持ちケズリを施しており、底径7.6cmとやや大きい。

10～14は土師器の壺である。10～12は小型の壺で、10, 11は外面にススが付着するなど、火にかけた痕跡が顕著である。12はP10と床面出土の破片が接合したもので、床面の破片には二次的な被熱が見られる。13はタタキの後ロクロナデで調整されている。14は他の壺に比べると口縁部形態などの作りが粗稚である。

15～18は須恵器の壺である。口径14cm、底径6.5cm、器高4.5cm前後のものが主体である。底部はいざれも回転糸切りで、15は体下部に手持ちヘラケズリを施す。16はP8・P10と外延溝から出土した破片が接合したもので、P8・P10の破片は二次的に被熱している。

19～21は須恵器の壺、22は壺である。19は口縁部内面、20は外面全体に自然釉が付着している。20は体下部ケズリの後、高台を付けており、壺底部の可能性がある。21, 22はタタキの後ロクロナデを

施している。22はロクロナデの前に、内面体下部にハケ目ナデを施している。

23～27はP12の出土遺物である。23、24は須恵器の环で、底部はいずれも回転糸切りである。25は土師器の鉢で内面にヘラミガキと黒色処理を施している。26、27は土師器の环で、27は底部回転糸切り後、部分的にミガキを施している。

28、29は管状土錘、30、31は鉄製の鎌、刀子である。

B 中近世

(1) 掘立柱建物跡・ピット群

【SA20a, b 柱穴列跡】(第3図)

〔位置〕1区中央部にある。

〔規模〕SA20aは3間で総長約5.4m、柱間寸法は南から約1.8m、1.9m、1.7mである。SA20bは2間で総長約3.5m、柱間寸法は南から約1.8m、1.7mである。この2列の柱穴列はほぼ平行しており、建物の可能性もある。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴の平面形は直径20～30cmの円形、不整な円形、または隅丸方形で、深さは確認面より16～39cmである。柱痕跡はすべての柱穴で認められ、直径約10cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色や褐色のシルトまたは粘土、柱痕跡が黒褐色や暗褐色のシルトである。

〔方向〕SA20aはN-11°-W、SA20bはN-4°-Wである。

【SA21柱穴列跡】(第3図)

〔位置〕1区の西端にあり、調査区の西側へ広がる建物の可能性がある。

〔規模〕3間で総長約5.4m、柱間寸法は南から約2.2m、1.2m、2.0mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴の平面形は直径20～30cmの円形または隅丸方形で、深さは確認面より16～45cmである。柱痕跡はすべての柱穴で認められ、直径10～12cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色シルト、柱痕跡が黒褐色シルトである。

〔方向〕N-12°-Wである。

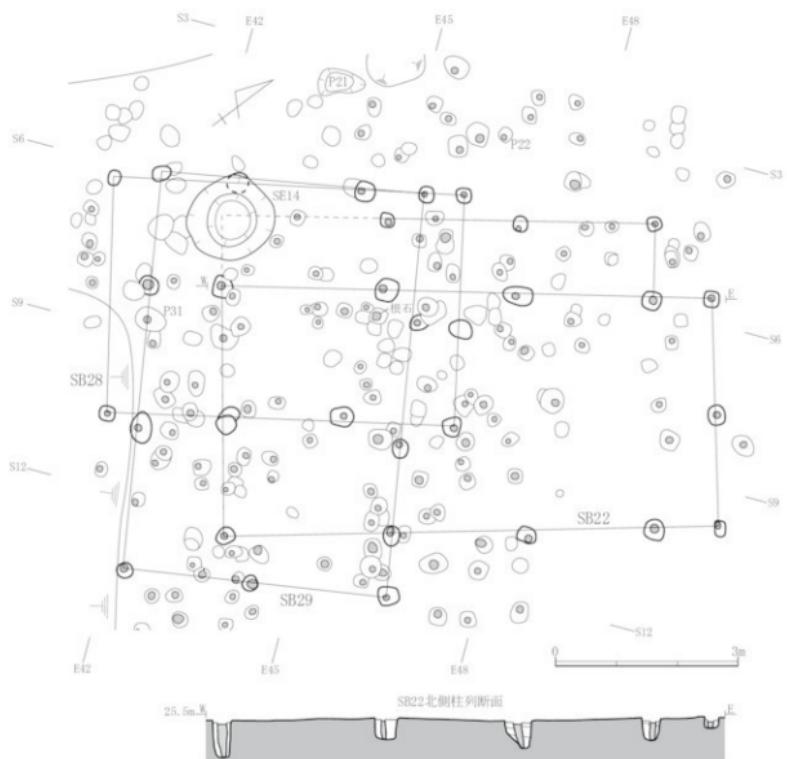
【SB22掘立柱建物跡】(第8図)

〔位置・重複〕3区中央部北西寄りにあり、SE14と重複し、これより古い。また、位置的にSB28・SB29とも重複するが、新旧関係は不明である。

〔構造〕東西4間、南北2間の東西棟建物跡で、北側に廂もしくは縁を持つ可能性がある。

〔規模〕身舎の桁行は北側柱列で総長約8.0m、柱間寸法は西から約2.6m、2.2m、2.3m、0.9mである。梁行は東妻で総長約3.8m、廂の出は約1.2mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は身舎で12個、廂で3個検出し、1箇所を除いて柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は、長軸25～50cm、短軸20～40cmの楕円形や隅丸方形で、深さは確認面より12～65cmである。



第8図 SB22・SB28・SB29掘立柱建物跡 (1/80)

柱痕跡は直径10~15cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色や明黄褐色のシルトで、柱痕跡が黒色や黒褐色のシルトである。

〔方向〕 北側柱列でN-39°-Eである。

【SB28掘立柱建物跡】(第8図)

〔位置・重複〕 3区中央部北西寄りにあり、SE14と重複し、これより古い。また、位置的にSB22・SB29とも重複するが新旧関係は不明である。

〔構造〕 東西3間、南北2間の東西棟建物である。

〔規模〕 桁行は南側柱列で総長約5.7m、柱間寸法は西から約2.0m、1.9m、1.8mである。梁行は東

妻で約2.8mである。

〔柱穴・柱痕跡〕 柱穴は9個検出し、うち5箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸25～40cm、短軸20～35cmの隅丸方形もしくは不整な円形で、深さは確認面より23～65cmである。柱痕跡は直径10～12cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒色、黒褐色、灰黃褐色のシルト、柱痕跡は黒色や黒褐色のシルトである。

〔方向〕 南側柱列でN-39°-Eである。

【SB29掘立柱建物跡】(第8図)

〔位置・重複〕 3区中央部北西寄りにあり、位置的にSE14、SB22・28と重複するが新旧関係は不明である。

〔構造〕 南北3間、東西2間の南北棟建物である。

〔規模〕 桁行は西側柱列で総長約6.5m、柱間寸法は北から約1.9m、2.3m、2.3mである。梁行は南妻で約4.3mである。

〔柱穴・柱痕跡〕 柱穴は9個検出し、うち8箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸25～50cm、短軸25～35cmの隅丸方形もしくは不整な円形で、深さは確認面より38～68cmである。柱痕跡は直径10～15cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色や暗褐色のシルト、柱痕跡は黒褐色のシルトである。

〔方向〕 東側柱列でN-45°-Wである。

【SB23掘立柱建物跡】(第9図)

〔位置〕 3区中央部北東寄りにある。

〔構造〕 南北4間、東西1間の南北棟建物跡である。

〔規模〕 桁行は東側柱列で総長約9.3m、柱間寸法は北から約2.1m、2.5m、2.3m、2.4mである。梁行は北妻で約4.2mである。

〔柱穴・柱痕跡〕 柱穴は10個検出し、すべて柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸25～35cm、短軸20～30cmの不整な円形で、深さは確認面より14～45cmである。柱痕跡は直径約10cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色シルト、または地山ブロック主体のにぶい黄褐色粘土で、柱痕跡は黒褐色のシルトである。

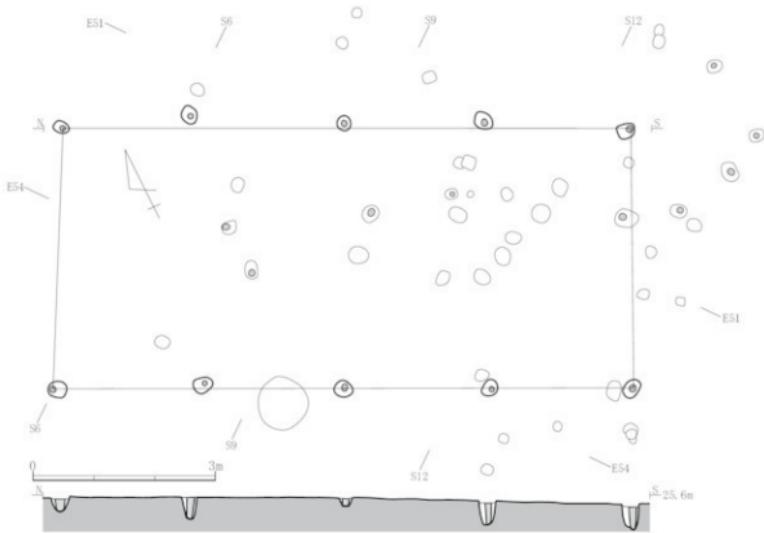
〔方向〕 北妻でN-28°-Eである。

【SB24掘立柱建物跡】(第10図)

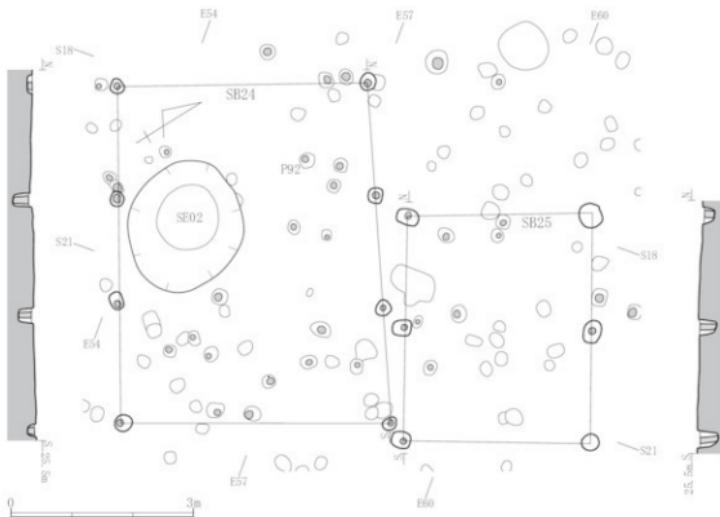
〔位置・重複〕 3区中央部南東寄りにあり、位置的にSE02と重複するが、新旧関係は不明である。

〔構造〕 南北3間、東西1間の南北棟建物である。

〔規模〕 桁行は東側柱列で総長約5.6m、柱間寸法は北から約1.8m、1.9m、1.9mである。梁行は北妻で約4.0mである。



第9図 SB23掘立柱建物跡 (1/80)



第10図 SB24・SB25掘立柱建物跡 (1/80)

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は8個検出し、すべて柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸25~35cm、短軸20~30cmの不整な円形もしくは隅丸方形で、深さは確認面より11~32cmである。柱痕跡は直径10~15cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを多く含む灰黄褐色にぶい黄褐色のシルト、柱痕跡が黒褐色や灰黄褐色のシルトである。

〔方向〕北東でN-32°-Eである。

【SB25掘立柱建物跡】(第10図)

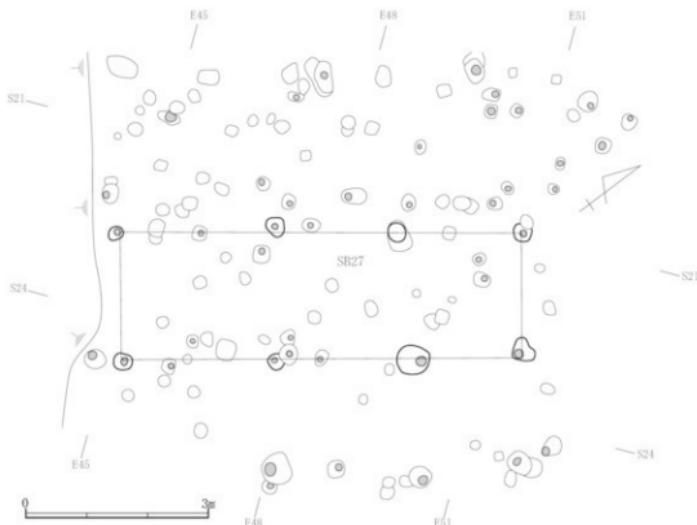
〔位置・重複〕3区中央部南東寄りにあり、SI01と重複し、これより新しい。

〔構造〕南北2間、東西1間の南北棟建物である。

〔規模〕桁行は西側柱列で総長約3.7m、柱間寸法は北から約1.8m、1.9mである。梁行は北東で約3.0mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は6個検出し、うち4箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸30~40cm、短軸25~35cmの不整な円形もしくは隅丸方形で、深さは確認面より18~37cmである。柱痕跡は直径約10cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色や灰黄褐色のシルト、柱痕跡が黒褐色のシルトである。

〔方向〕北東でN-32°-Eである。



第11図 SB27掘立柱建物跡 (1/80)

【SB27掘立柱建物跡】(第11図)

〔位置〕3区中央部南西寄りにある。

〔構造〕東西3間、南北1間の東西棟建物である。

〔規模〕桁行は北側柱列で総長約6.6m、柱間寸法は西から約2.5m、2.0m、2.1mである。梁行は西妻で約2.1mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は10個検出し、うち8箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸30~55cm、短軸25~50cmの楕円形もしくは不整な円形で、深さは確認面より21~69cmである。柱痕跡は直径10~15cmの円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色シルト、柱痕跡は黒褐色のシルトである。

〔方向〕北側柱列でN-37°-Eである。

【その他のピットと出土遺物】(第3図・第4図・第14図)

上記の掘立柱建物跡以外にも、1区~3区で多数のピットが検出されている。柱痕跡を残すものが多いことなどから大部分は柱穴で、削平された部分も含めてさらに多くの建物があったと考えられる。

3区のピットからは中世陶磁器が出土している(第14図1~4)。1は白磁の壺の底部破片で、SB24の周辺のピットから出土した。体部外面に瓜形の凹凸を有し、底面以外の外面及び内面全体に薄い青みを帯びた釉が施されている。高野山奥之院などに出土例があり、時期は南宋時代12~13世紀とされる(小山1975)。2~4はSB22の周辺のピットから出土した。2は瀬戸産灰釉陶器の瓶子の破片で、外面に唐草文状の文様が描かれている。古瀬戸後一期に位置づけられ、時期は14世紀後葉とされる(藤澤2005、愛知県史編さん委員会2007)。3、4は瓷器系陶器の擂鉢の破片で、4は体下部に手持ちケズリを施した後、高台を付けている。胎土・色調などから、東海諸窯からの搬入品というよりも、その影響を受けた在地の窯で生産された可能性が高い。高台付きの擂鉢の生産遺跡は県内では今のところ知られていないが、福島県梁川町の八郎窯跡の製品が13世紀前半~中頃に位置づけられており(菅野2003)、4も近い時期であろう。

(2) 溝跡

【SD05溝跡】(第4図、第12図)

〔位置〕3区中央部西寄りにあり、SE06と重複し、これより新しい。

〔規模・形態〕北東から南北方向へやや湾曲しながら延びる溝跡で、両端とも削平を受けている。検出長は約10.8m、最大で幅約2.1m、深さ約0.3mで、壁は緩やかに立ち上がる。

〔方向〕N-41°-Eである。

〔堆積土〕1層認められた。暗褐色シルトの自然流入土である。

〔遺物〕堆積土から陶器の皿の破片が出土している(第14図5)。波状の口縁と凹凸のある体部から「菊皿」で、胎土・釉から桃山陶器(志野)と考えられる。

〔性格〕SB22・SB27・SB28と方向が一致することから、区画溝の可能性がある。

【SD08溝跡】(第3図、第12図)

〔位置〕1区中央部に位置する。

〔規模・形態〕南から北方向へ延びる溝跡で、北側は搅乱によって壊され、南側は調査区外へ続いている。検出長は約20.8m、最大で幅約1.9m、深さ約0.6mで、断面は逆台形状を呈するが、西壁の立ち上がりはやや緩やかである。

〔方向〕N-13°-Wである。

〔堆積土〕6層に分けられ、すべて自然堆積である。断面観察から大きく3層に大別され、ある程度土が堆積した段階で、2度にわたって掘り返されたと考えられる。

〔遺物〕堆積土から陶器の小型壺の底部破片が出土している(第14図6)。無釉で、内面には多量の鉄分が付着している。

〔性格〕この溝の西側からは3本の柱穴列を含む多数のビットが分布しており、東側からはまったくビットが検出されなかったことから、これらのビット群(建物群)を囲む区画施設であったと考えられる。

【SD18溝跡】(第4図、第12図)

〔位置・重複〕3区北部に位置する。一部のビットと重複し、これより新しい。

〔規模・形態〕北東から南西方向へ延びる溝跡で、両端とも削平を受けている。中央部も搅乱によつて壊されているが、ひと続きの溝跡と捉えた。検出長は約28.8m、最大で幅約2.0m、深さ約0.4mで、壁は緩やかに立ち上がる。

〔方向〕N-36°-Eである。

〔堆積土〕3層に分けられ、黒褐色シルトが自然堆積している。

〔遺物〕堆積土から近世陶磁器の破片が出土している(第14図7~9)。

〔性格〕この溝の南側からは7棟の掘立柱建物跡を含む多数のビットが分布しており、北側からはほとんどビットが検出されなかったことから、これらのビット群(建物群)を囲む区画施設であったと考えられる。

(3) 井戸跡

【SE02井戸跡】(第12図)

〔位置・重複〕3区中央部南東寄りにあり、位置的にSB24と重複するが、新旧関係は不明である。

〔規模・形態〕井戸枠等は検出されておらず、素掘りの井戸である。平面形は、上面が長軸約2.2m、短軸約1.9mの楕円形で、底面は直径約1mの円形である。深さは確認面より約1.1mで、断面は漏斗形を呈する。

〔堆積土〕8層に分けられ、すべて自然堆積である。

〔遺物〕堆積土から土師器・須恵器が出土しているが、いずれも小片で磨耗している。

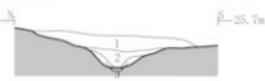
SD08



SD08

層	上・下色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック小・中を多く含む。
2	灰黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック含む。粘性あり。90%含む。
3	暗褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロック小・中を多く含む。
4	黑褐色(10YR3/2)	粘質シルト	地山ブロック小・中を多く含む。
5	黑褐色(10YR3/1)	粘質シルト	砂混じり。
6	灰・黄褐色(10YR5/3)	粘質シルト	地山ブロック大を多く含む。

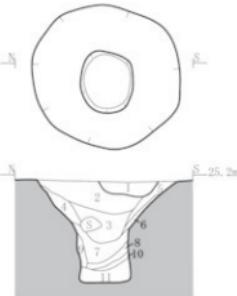
SD18



SD18

層	上・下色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物をわずかに含む。
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	1cmより黒味強。地山ブロック少・炭化物わざか。
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロック小を多く含む。

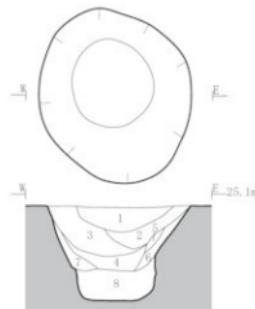
SD05, SE06



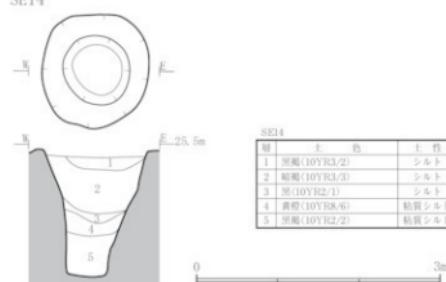
SD05・SE06

層	上・下色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	SD05地盤土。地山ブロック小を少量含む。
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロック小・中を中量。炭化物を少量含む。
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロック少・炭化物を少量含む。
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロック小・中を多く含む。
5	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロック小を多く含む。
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山を堅状に含む。壁面の薄墨土。
7	黒褐色(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロック少・中を中量。炭化物を少量含む。
8	黒褐色(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロック少・中を多く含む。
9	灰・黄褐色(10YR6/4)	粘質シルト	地山を薄土。
10	灰・黄褐色(10YR6/3)	粘質シルト	地山を薄土。
11	黒褐色(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロック小を少量含む。

SE02



SE14



SE14

層	上・下色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック少・炭化物をわずかに含む。
2	黒褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック大・多量。炭化物わざか。人為堆土。
3	黒褐色(10YR2/1)	シルト	地山ブロック少・中を含む。壁面に大きな地山ブロック。
4	黄褐色(10YR8/6)	粘質シルト	地山土に近い。
5	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	堅硬に地山を堅状に含む。下半部フライ化。

第12図 SD05・08・18溝跡, SE02・06・14井戸跡 (1/60)

【SE06井戸跡】(第12図)

〔位置・重複〕3区中央部にあり、SD05と重複し、これより古い。

〔規模・形態〕井戸枠等は検出されておらず、素掘りの井戸である。平面形は、上面が直径約1.8m、底面が直径約0.6mでいずれも不整な円形である。深さは確認面より約1.2mで、断面は漏斗形を呈する。

〔堆積土〕10層に分けられ、すべて自然堆積である。

【SE14井戸跡】(第12図)

〔位置〕3区中央部北西寄りにあり、SB22・28と重複し、これより新しい。また、位置的にSB29とも重複するが、新旧関係は不明である。

〔規模・形態〕井戸枠等は検出されておらず、素掘りの井戸である。平面形は、上面が直径1.3～1.4m、底面が直径約0.6mでいずれも不整な円形である。深さは確認面より約1.6mで、断面形は漏斗形に近いが、上部の広がりが小さい。

〔堆積土〕5層に分けられる。3～5層が自然堆積した後、大きな地山ブロックを多量に含む2層で人為的に埋められ、窪んだところに1層が自然堆積したと考えられる。

C その他の遺構・遺物

(1) 土壙跡

【SK13土壙跡】(第13図)

〔位置〕3区北西

〔規模・形態〕平面形は、上面が長軸1.2m、短軸0.8m、底面が長軸0.8m、短軸0.4mでいずれも梢円形を呈する。深さは確認面より0.8m、壁は凹凸を持ちながら急に立ち上がる。

〔堆積土〕6層に分けられ、すべて自然堆積である。

〔遺物〕出土していない。

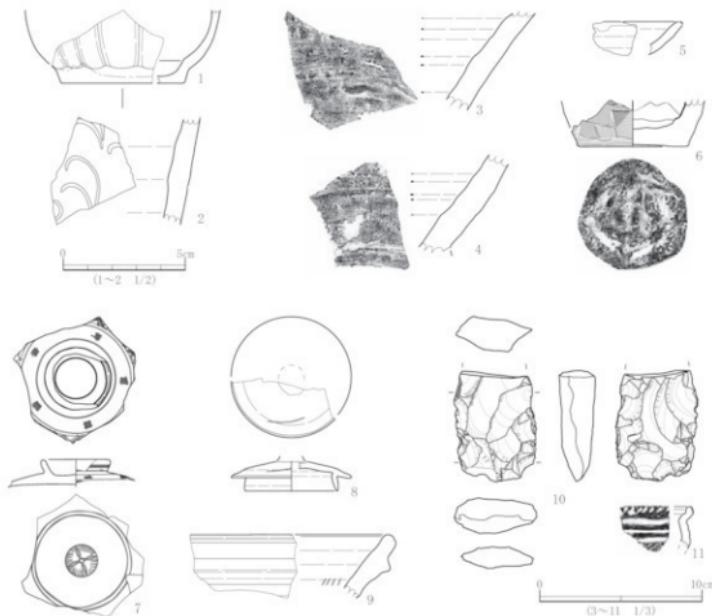
〔性格〕陥穴と考えられる。

(2) 縄文時代の遺物(第14図10, 11)

少量の縄文土器・石器が、表土や別時代の遺構から出土している。10は短冊形の打製石斧で、基部は欠損している。石材は安山岩もしくは流紋岩と考えられ、表面は風化が顕著である。11は浅鉢形土器の口縁部破片で、縄文晩期大洞C2式と考えられる。



第13図 SK13土壤跡 (1/60)



No.	遺物	出土遺構	備考
1	白磁 磷	3H-P92(第10回)	灰(径5.0cm、残存高3.0cm、弧形、内外面(底面以外)に青い青みを帯びた施
2	灰釉陶器 瓶子	3H-P31(第8回)	丸瓶(口、唐草文)
3	金銀系陶器 瓶鉢	3H-P21(第8回)	表面は暗赤褐色、跡粒多い
4	金銀系陶器 瓶鉢	3H-P22(第8回)	全体手すきけ(ケズリ)付け高台、表面は暗褐色(内面下部のみ明褐色)、跡粒多い
5	陶器 瓢	SD05	土野瓢箪、長石槌
6	陶器 小懸垂	SD06	灰径6.5cm、外面ナギ溝型、内部に鳥分付着
7	陶器 瓢	SD18	リング状のつまみ、乳頭による巻の付け
8	陶器 瓢	SD18	つまみ矢柄
9	陶器 オリ鉢	SD18	無柄、表面黒褐色
10	石質右岸	SD18	高張灰岩、長さ9.0cm、幅3.1cm、厚さ2.2cm、安山岩もしくは流紋岩か、表面風化
11	鐵土上部 浅鉢	SD10-1層	塊状大鉄C2式、L片折鉢文、口沿上部のみ、内面風化

第14図 ピット・溝跡・その他の出土遺物

第IV章　まとめ

(1) 古代

SI01堅穴住居跡の調査で、周溝や土壌から土師器・須恵器が比較的まとまって出土した。P12以外の土壤は住居廃絶直後に掘られたと考えられ、相互に接合関係の認められるものが多くあることから、ほぼ同時期のものと考えられる。未報告の破片も含め、全体として以下のような特徴が挙げられる。

- ・ 土師器は基本的にロクロを用いている。
- ・ 須恵系土器は認められない
- ・ 壺の底部は、土師器・須恵器とも回転糸切り無調整か手持ちケズリが多数で、ヘラ切りはごくわずかの破片に見られるのみである。
- ・ 壺の底径は土師器5.5～7cm、須恵器5～7cm程度が主体で、いずれも口径の半分以下である。
- ・ 土師器の壺で、タタキ→ロクロ調整を施すものが一定量認められる。

類似する様相をもつ一括出土例としては、色馬古墳群第15号住居跡（宮教委1984）、中峯A遺跡第10号住居跡（宮教委1985）などが挙げられ、おおよそ9世紀中葉～後葉に位置づけられる。なお、古い段階に掘られたP12出土土器と、廃絶後と考えられるその他の土器に、器形・調整などの点で明瞭な差は認められない。よって、住居についても上記と同じ時期と考えてよいであろう。

今回の調査ではSI01以外に古代の遺構は検出されていない。調査区南側へ集落が展開していた可能性はあるが、比較的小規模な集落だったと考えられる。

(2) 中近世

1区と3区において、多数の掘立柱建物跡・ピットとそれらを区画する溝が検出されたことから、屋敷跡の遺構と考えられる。1区のピット群はSD08に、3区のピット群はSD05やSD18に区画されおり、両者は別のまとまりを形成している。

3区のピットからは中世陶磁器が4点出土しており、屋敷跡の年代は中世までさかのほると考えられる。中世陶磁器の生産年代は12～14世紀とばらつきがあるが、白磁の壺は中世この地域ではほとんど類例のない貴重な品といえるので、伝世していた可能性もある。また、このような遺物から屋敷の住人がある程度身分の高い者であったと推測できる。

また、3区のピット群を区画する溝からは、桃山陶器1点（SD05）、近世陶磁器3点（SD18）が出土している。ピットからこれらの時期に対応する遺物は出土していないが、表土に近世陶磁器が含まれていることや、多数の掘立柱建物跡・ピットが存在することから、中世～近世にかけて、継続的にもしくは断続的に屋敷地が営まれたと考えられる。

今回の調査では擾乱による制約もあって詳細な建物構造の把握は困難だが、SB22・SB28・SB29付近には最も多くのピットが集中しており、大きさ・深さなどの点でも良好な柱穴が多い。よって、ここに中心となる建物が存在した可能性が高く、周辺にSB23～25・SB27などの付属的な建物があったと考えられる。

【参考文献】

- 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 濱戸系
- 大衡村教育委員会 1995 『亀岡遺跡』大衡村文化財調査報告書 第1集
- 菅野崇之 2003 「八郎窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会編 高志書院
- 小山富士夫 1975 『高野山奥之院出土陶片について』『高野山奥之院の地寶』和歌山県文化財学術調査報告書 第六冊
- 藤澤良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』
- 宮城県教育委員会 1984 『色麻古墳群』『宮城県宮園場整備関連遺跡詳細分布調査報告書』宮城県文化財調査報告書 第100集
- 宮城県教育委員会 1985 『中峯遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書 第108集
- 宮城県教育委員会 1990 『天皇寺遺跡』『寂光寺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 第135集
- 宮城県教育委員会 1999 『一里塚遺跡－第44・47次発掘調査報告書－』宮城県文化財調査報告書 第179集
- 宮城県教育委員会 2007 『旧大衡役場前遺跡』『東北地方整備局関連遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書 第211集



調査区全景（北東から）



3区全景（南西から）



1区全景（南西から）



SI01竪穴住居跡（北から）



SB22掘立柱建物跡（北東から）

図版2



SB23掘立柱建物跡（北西から）



SB24掘立柱建物跡（北西から）



SB25掘立柱建物跡（北西から）

図版3



SB24柱穴断面



SB25柱穴断面



SA21柱穴断面



SD08溝跡（南から）



SD18溝跡（北東から）



SE02井戸跡断面（南から）



SE06井戸跡断面（南西から）

図版 4



第6図-3



第6図-4



第6図-3（墨書）



第6図-7



第7図-15



第7図-16



第7図-23



第6図-10



第6図-13



SI01出土 土製品・鉄製品



縄文時代の出土遺物



陶磁器（第14図）

図版6

報告書抄録

報告書抄録

ふりがな	たいらばやしいせき							
書名	平林遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第215集							
著者名	初鹿野博之							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8-1 TEL 022-211-3685							
発行年月日	西暦2008年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
平林遺跡	黒川郡大衡村大衡字平林	市町村	道路番号	北緯	東経	2007.5.7 ～6.18	約2,000m ²	主要地方道大衡落合線道路改良事業に伴う事前調査
平林遺跡		44245	26029	38° 27' 59"	140° 52' 38"			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平林遺跡	集落跡	古代	竪穴住居跡1軒		土師器・須恵器・土製品・鉄製品			
	屋敷跡	中近世	掘立柱建物跡7棟、溝跡3条、井戸跡3基、ピット群		陶磁器			
要	約	平林遺跡は、宮城県黒川郡大衡村南部の丘陵端部に位置する遺跡である。今回の調査では古代の竪穴住居跡1軒、中近世の掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、多数のピットなどを検出した。竪穴住居跡は、出土遺物から9世紀中葉～後業に位置づけられ、調査区周辺に小規模な集落が展開していたと考えられる。中近世の遺構は、多数の掘立柱建物跡やピット群とそれらを区画するような溝があることから、戸敷地であったと考えられる。また、これらの遺構から中近世の陶磁器が出土しており、特に中国窯の白磁の壺(12～13世紀)や、瀬戸焼の灰釉陶器の瓶子(14世紀後葉)は、周辺の遺跡ではほとんど類例のないものである。文献史料の少ないこの地域の中世社会を探るうえで貴重な手がかりを得ることができた。						

宮城県文化財調査報告書第215集

平林遺跡

平成20年3月21日印刷

平成20年3月25日発行

発行 宮城県教育委員会

仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24
